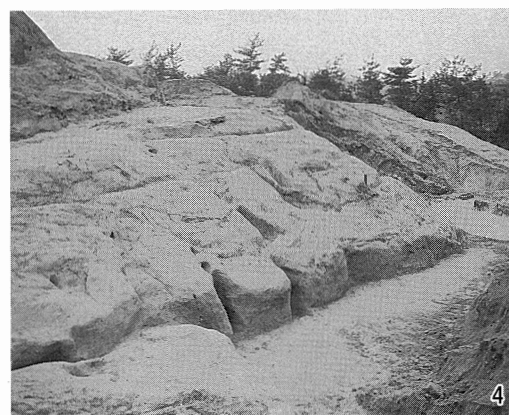
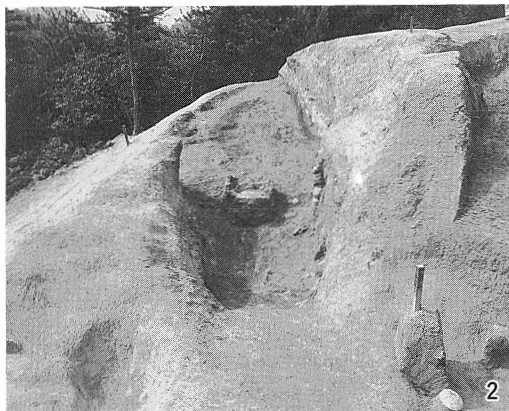
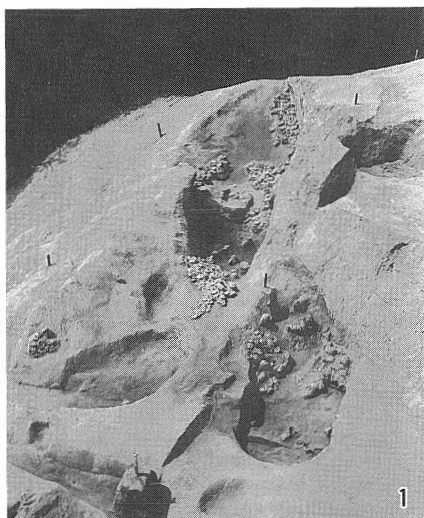


# 埋蔵文化財 愛知

No.31



## 写真

- 1 窯と窯前ピット(東から)
- 2 窯体完掘状況(東から)
- 3 ステップとテラス(東から)
- 4 粘土貯蔵場所(水がある所、南から)

## 子持古窯跡

西加茂郡三好町に所在する山茶碗を焼造した鎌倉時代の窯跡。窯体のほかに、窯前ピット、灰原、粘土溜め土坑などを検出した(4頁に関連記事掲載)。

シリーズ「古代を掘る」3

## 飛鳥時代における須恵器生産の展開

### 須恵器生産のはじまり

古代窯業生産史上、最も大きな出来事は須恵器生産の開始であった。須恵器生産は成形に「ロクロ」を用いることと焼成に「窯」を用いることで、当時としては革新的なものであった。この技術は5世紀代に朝鮮半島よりもたらされたものと考えられている。近年、大阪府陶邑古窯跡の近くにある大庭寺遺跡や小坂遺跡の調査で、朝鮮半島のものによく似た形態の須恵器が多数出土しており、工人が直接渡来して生産したことが想定されている。

愛知県には陶邑古窯跡群と並ぶ古代窯業生産の一大中心地であった猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯とする）が存在する。猿投窯は名古屋市東部周辺にかけて広がる窯跡で、5世紀代半ばにさかのぼる窯が東山地区などで見つかり、最も早い時期から生産を開始していた窯跡の一つであると考えられている。しかも、生産された須恵器の形態・技法には陶邑古窯跡群のものと違う点もあり、生産に関わった工人の系譜に違いがあった可能性もある。

### 「葬送具」から「供膳具」へ

6世紀代になると、群集墳の形成にともない、副葬品として大量の須恵器が必要となった。これらの需要を満たすために、全国的にも生産が拡大し、窯の数も増加した。

須恵器自体をみると、形態などで若干の変化はあったが、蓋杯・高杯・甕といった基本的な器種組成には大きな変化はなかった。

5世紀・6世紀代の窯は埴輪を併焼している例も多く、在地を支配する豪族層との結び付きが強かったものと思える。そして、その製品は、古墳への副葬を中心とした「葬送具」の性格が色濃いものであった。

ところが、7世紀になると須恵器生産に大きな変化が現れる。「葬送具」の基本的な器種であった蓋杯・高杯・甕などの生産は減少し、代わって碗・杯・盤などが主流となった。これらの

形態のなかには朝鮮半島などからもたらされた金属器を指向した形態のものもあり、半島より伝わった仏教文化を中心とする新しい文化の影響が窺われる。用途は儀式や宴会に使われる「供膳具」としての性格が強かったものと思われる。中央では7世紀後半になると、これらが口径や器高により何種類かに器種分化した「律令的土器様式」が確立してくる。

### 飛鳥時代の須恵器生産

律令制の整備にともない、官衙や寺院などで必要とされた須恵器の量も増大することとなった。これに対して生産地ではどのような変化が起こったのであろうか。

愛知県の場合、まず窯跡の分布についてみると、猿投窯ではそれまで東山地区に限定されていたものが東へ広がり、岩崎地区・鳴海地区・折戸地区など周辺地区へ定着し、放射状に生産地が広がっていく。また、猿投窯に次ぐ規模の尾北古窯跡群も7世紀後半代に新たな展開を見せ、生産が大きく拡大した。

また、製品について見てみると古墳時代の器種構成から歴史時代のそれへ複雑に変化している。以下、少し具体的にみている。

### 6世紀末～7世紀前葉（東山44号窯式）

この段階ではまだ新しい様相は見られず、器種組成は古墳時代通有のものである。主体となるのは蓋杯・高杯である。蓋杯の身の口径はまだ約10～11cmとかなり大きい。高杯は長脚2段3方透かしのものである。

### 7世紀中葉（東山50号窯式）

この時期には新しい器種が幾つも出現してくる。しかし、主体となるのは基本的には在地の需要に根ざした蓋杯である。ただ、口径はおおよそ9cmで、前段階よりも1cm近く縮小している。この時期より、新たにかえりのついた杯蓋、無台杯身、盤類が出現する。高杯も見られるが透かしが2方向のものがほとんどとなる。この時期から金属器を模倣した形態の器種と円面硯

がみられることに注目しておきたい。

### 7世紀後葉（岩崎17号窯式）

この時期より器種構成がかなり豊富となり、1つの器種で口径や器高により分化が見られるようになる。供膳具では依然として前代の蓋杯が見られる。しかし、口径約8cmと最少のものとなり、蓋受けのかえりも形骸化する。数量的にもごくわずかなものとなる。主体となるのは新しい要素であるかえりのついた蓋である。身としては、無台杯身に加えて有台杯身が登場し、次の時代の基本的なセットがそろう。

### 7世紀末～8世紀前葉（岩崎41号窯式・高蔵寺2号窯式）

器種組成では杯蓋でかえりがつく形態のものが見られなくなり、口縁端部を折り返す形態のものとなる。有台杯身の中には底部が高台より突出する形態のものが顕著にみられる。高杯は比率が大きく減少する。新たに有台形態の皿が出現する。器種分化が激しくなる。

### 飛鳥時代須恵器生産の位置づけ

愛知県で生産された須恵器が石神遺跡など飛鳥地方の遺跡から出土する例がしばしばみられる。この時期に中央に運ばれたものはごく少量であったと思われるが、奈良時代後半になると壺・瓶類が平城京から多数出土しており、中心的な窯業地となった。また、平安時代になると奈良時代の生産を母胎として、わが国初の本格的な施釉陶器生産を開始するようになる。

このような愛知県での古代窯業生産発展の基礎が形成されたのは飛鳥時代であったように思える。飛鳥時代は基本的には在地の需要に根ざした生産を行いながらも、都にも製品が運ばれ、中央で認知され、結び付きが強くなっていった時期であったと思えるからである。しかし、このような結び付きのものは何であったのだろうか。この点については今後さらに検討していかなければならない課題として残されている。

（課長補佐 城ヶ谷和広）

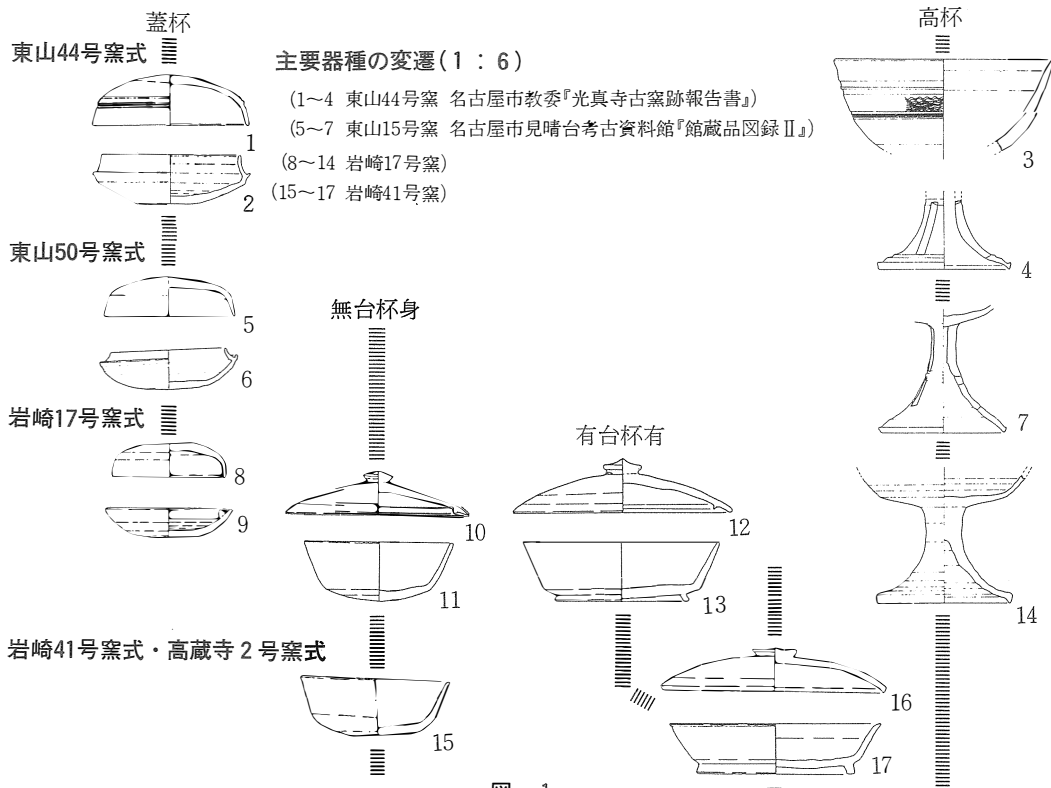


図 1

## 遺跡紹介

## 子持古窯跡

西加茂郡三好町

子持古窯跡は西加茂郡三好町字子持松に所在する13世紀前半の古窯跡で、標高100m前後の丘陵南端付近の東側斜面に立地する。平成4年7月から10月にかけて窯跡を中心に約1300㎡の調査を実施し、多くの成果を得た。

窯体SY01は、現存長7m、最大幅3.13m、床面傾斜30度を測り、煙出し部分が滅失していた。焼成室内では、焚き口から見て右側に、乱雑に積み重なった状態で焼台が集中し、また分焰柱周辺から山茶碗が積み重なって多数出土した。断ち割りにより、2面の床面を確認した。

前庭部では2基の窯前ピットを検出した。SK01は長径3.31m、短径2mの楕円形で、数多くの山茶碗が出土した。SK02は長径4.8m、短径1.92mを測る楕円形で、北西の壁の上部から陶丸が34個入った山茶碗が出土した。

土坑SK03は、窯体から13m東で検出した長辺2.1m、短辺0.9m、深さ0.7mの土坑である。灰白色粘土層の下に厚さ5cmほどの砂層があり、底面には小礫（直径2～5mm）の薄い層があった。粒径の大きさの順に堆積していることから、

粘土溜め土坑として使用されたと考えられる。この粘土溜め土坑を2回目の作業時の灰層が被覆していた。

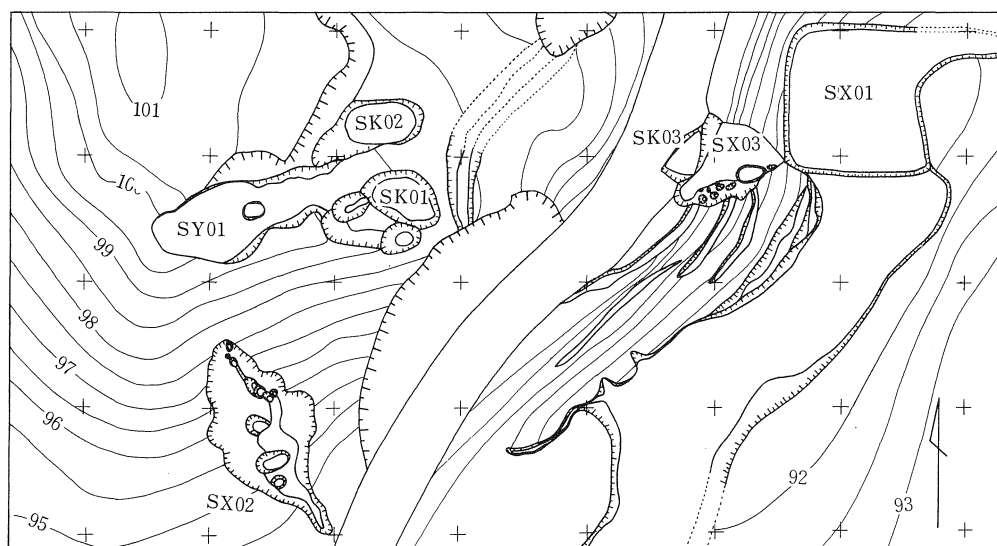
SX01はSK03の東側下方の谷底で検出した一辺5mの大規模な方形の土坑である。床面は平坦で、直径数cm～60cmの灰白色の粘土塊が見つかった。谷の崖面に認められる厚さ約5cmの粘土層から粘土を採掘し、貯蔵しておくために作られた施設であろうか。

またSK03の南端からSX01にかけて、崖面を削ったステップを7段検出した。また、この南ではほぼ水平に延びる幅約50cmの細長いテラスを5段確認した。谷底で採掘した粘土を運び上げる目的でつくられたと考えてよいであろう。

遺物としては、13世紀前半代の山茶碗・小皿があり、窯内・前庭部・灰原から非常に数多く出土した。他に若干の陶丸もあった。

残念ながら工房跡が検出できなかったが、子持古窯跡の調査では、粘土採掘・貯蔵場所、精製場所、通路、灰原、窯など窯業生産の有機的な関連施設が確認でき、ともすれば窯体・灰原のみで終了していた窯跡の発掘調査に、一石を投ずるものとなった。

（調査研究員 小澤一弘）



遺構配置図 (1:300)

## 清洲城下町遺跡

西春日井郡清洲町

清洲城下町遺跡は濃尾平野のほぼ中央を流れる五条川（木曽川水系）の中流域に形成された自然堤防および後背湿地上に展開する古代から近世にかけての複合遺跡である。昭和57年度に名古屋環状2号線建設にともなう発掘調査が開始されて以来11年になり、調査総面積も延べ60,000㎡を越えている。今年度は県道新川清洲線の拡幅にともなう調査1,010㎡（92A, B区）と、五条川改修にともなう900㎡（92C, D, E, F区）が予定され、11月末現在A, B, E, F区の調査を終了している。現在までの調査で奈良時代の竪穴住居跡1棟、戦国から江戸時代の井戸、土坑、溝など多数の遺構を確認した。そのなかで特に注目されるのがB区で検出された土坑（SK39）と、F区ではほぼ清須古城絵図どおりの位置から検出された清洲城の内堀であろう。

SK39からは清洲城下町前期の良好な一括遺物が出土しているが、なかでも李朝の粉青沙器刷毛目茶碗や、「鳥」と「草」を線刻した常滑の大甕（16世紀初頭）は当遺跡での初見例となる。喫茶具を多量に含むこの遺構の出土遺物は量、質ともに今年度検出した他の遺構を圧倒しており、この地に暮らした人の豊かな生活を物語っている。またこの遺構の検出面の絶対高は約3.8 m

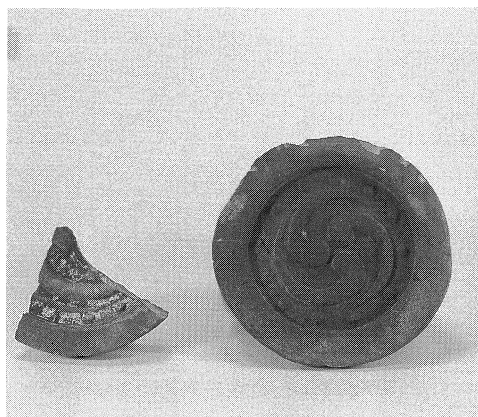
であり江戸時代の生活面の絶対高と大差がない。このことは他の調査区でも認めることができ、五条川左岸のこの地区では、少なくとも城下町前期のある時期以降、江戸期とあまり変わらない高さに人々が暮らしていたことが確認できた。

つぎに清洲公園の南に隣接するF区で検出された内堀であるが、調査区全体が堀のなかに入っており、上層を水田と用水路によって攪乱されているため、平面プランや深さなど正確なことは確認し得なかった。調査区内での堀の深さは最深部で80cmあり、西から東に向かって（五条川に向かって）深くなっている。堀の埋土は上層が黒色粘土であり、下層は黒色粘土に砂が混じる。出土遺物は、軒丸瓦18点、軒平瓦3点、鯨瓦1点をはじめとして大半が瓦であり、軒丸瓦のうち2点は金箔瓦である。なお出土した丸瓦のなかには、凸面に「助二□」「孫か介」「二郎四郎」「藤右衛門尉」と刻書されたものがあり注目される。遺物の出土状況で興味深いのは、ほとんどの瓦の出土レベルが黒色粘土層の中層～上層部に限られ、堀の下層部からの出土が少ないことである。このことは堀がある程度埋まった時期に城またはそれに付属する建造物が廃絶したことを示唆しているのではなかろうか。また軒丸瓦と軒平瓦の出土数のアンバランスは今後の検討課題となろう。

（調査研究員 蟹江吉弘）



B区 SK39出土 粉青沙器刷毛目茶碗



F区 内堀出土 軒丸瓦(左が金箔瓦)

## 市町村だより

### N N 288号 窯

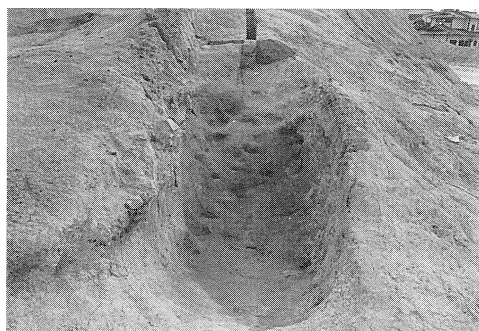
名古屋市教育委員会

N N 288号窯は名古屋市天白区の東端、日進町境に近い標高55m程の丘陵東向き斜面上にある。土地区画整理事業に伴い、本年5月から6月にかけて発掘調査を実施した。

窯体は操業停止後、流水による浸食をうけ大きく削り取られており、燃焼室と焼成室の一部(窯体残存長5m弱)が残っていたに過ぎない。窯体には、大型の舟底状ピット(長軸方向の長さ4.1m)と舟底状ピットから続く排水溝が付属していた。

灰原は、窯体と較べると遺存状態がよく、約10m×10mの範囲にわたって黒色灰層が残存していた。黒色灰層は3層に分層が可能であったが、明確な間層はなく、各層が窯の1回ごとの操業に対応するものであるかどうかは判らない。

出土した遺物は、須恵器の杯蓋・有台杯・無台杯・横瓶・台付長頸瓶・平瓶・短頸壺・陶馬



・フラスコ形瓶、及び土師器甕などで、コンテナケースに約20箱と多くない。しかし出土遺物が、これまで猿投窯では調査事例の少なかった8世紀始めを前後する時期のものであり、この時期の窯跡の殆どが既に滅失している現状を考え併せると、当該期須恵器生産の様相を明らかにしていく上で貴重な資料であると言える。

なお、調査の過程で本窯南側約13mの地点で別の須恵器窯を発見しているが、時期的には8世紀後葉に属するもので、本窯との間にはやや時間的に隔たりがある。

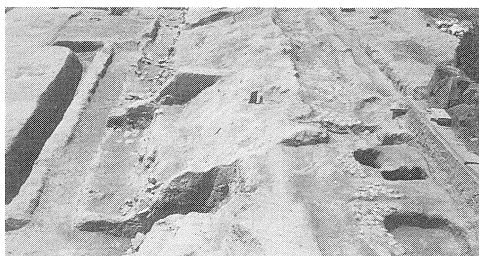
(尾野善裕)

### 挙母(七州)城跡

豊田市教育委員会

挙母城は挙母藩(二万石)内藤氏の居城であり、豊田市小坂本町8丁目に位置する。典型的な平山城で七州城の別名がある。調査は市美術館建設に伴うもので、平成5年3月までの予定で、1.4haを対象としている。

本丸正面で石垣の基礎部分の掘り形と根石の一部、石敷列を検出した。石垣の基礎は旧地形の斜面下段に幅1.5~2m、深さ50cm余の溝状の掘り形が東西60m以上あることが判明。敷石列は石垣の内側に平行して発見され、地山を幅1.5m、深さ2.30cmの溝状に掘り、底に拳大の円礫が敷き詰められていた。石敷列は正門の部分からは検出されなかった。以上の事実から正門を中心に、堀と倉庫を兼ねた多門長屋のあったことが判明した。本丸内部については、10月以後の着手のため番所、井戸、厨房跡、大小ピット等が明らかになってきた段階であり、全容については今後に待たれる。二の丸の一部に近世の陶磁



器類を含む幅20m余の小枝谷が発見され、大量の瓦、陶磁器類が出土している。明治末期の学校建設に際し、本丸内部の廃材、瓦礫等をかき集め当谷に投棄したという古老の伝承と合致していた。

出土遺物のうち瓦は巴、唐草紋の軒瓦が主である。陶磁器は素焼大甕、コンロ、水指、すり鉢、こね鉢、大小鉢類、皿、蓋付の碗、茶碗、行平鍋、片口、汁注、土瓶、焼塩壺、徳利、杯、灯明皿、行灯皿、香炉、仏飯具、火鉢、十能、植木鉢など器種も豊富である。城の存続期間が天明年間(1781~1788)以降の90余年間に限定されることから陶磁器研究の好資料となると思われる。

(松井孝宗)



## 発掘調査ニュース

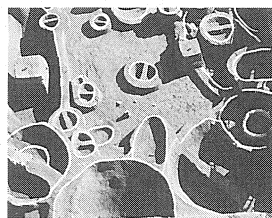
## 清洲城下町遺跡



C区全景

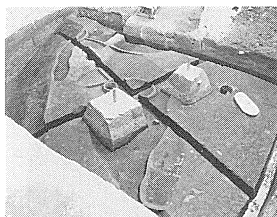
C、D区上面からは江戸期の建物礎石と井戸が確認された。遺構の検出状況から宿場期の美濃街道に面した建物とその裏手に掘られた井戸という景観が想定される。なおSK01とSK61からは江戸前期(17世紀後半)と城下町前期(16世紀前半)の良好な一括遺物が出土した。(蟹江)

## 西春日井郡清洲町



D区西半

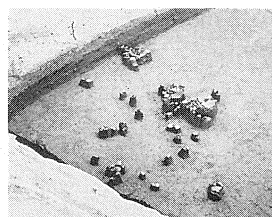
## 月縄手遺跡



A区下面全景

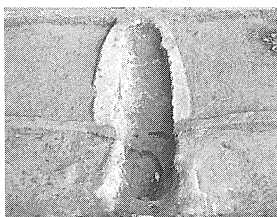
月縄手遺跡は名古屋市西区に所在する弥生時代前期および古墳時代前期の集落遺跡である。弥生時代前期では自然流路や大溝(環濠?)、古墳時代前期では方墳とみられる溝のほか縦横にはしる小溝や土坑・土器溜りなどがみついている。(樋上)

## 名古屋市



B区上面土器出土状況

## 黒笹第40号・89号窯跡



黒笹第40号窯(西から)

西加茂郡三好町に所在する40号窯と89号窯は、ともに米ヶ廻間谷に面している。両窯間の距離は、20m程である。しかし、両窯の操業時期は異なり、40号窯は8世紀末～9世紀初、89号窯は9世紀後半である。現在、窯体と灰原などの確認調査を実施している。(杉浦)

## 西加茂郡三好町



黒笹第89号窯(北西から)

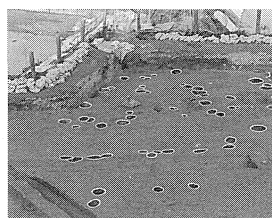
## 牛ノ松遺跡



谷と西集落(北西から)

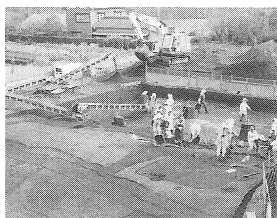
D区では、既に調査を終了したA・B区で確認された谷地形を挟んで東西に展開する中世集落の内、西集落の一部を検出。柵列・掘立柱建物・土坑等を検出したが、屋敷地を区画する溝は確認されなかった。灰釉系陶器、土師皿、貿易陶磁等が出土している。(川井)

## 額田郡幸田町



掘立柱建物(南から)

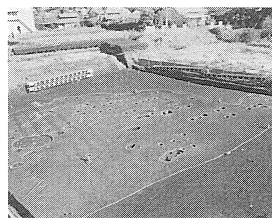
## 島田陣屋跡



作業風景(北から)

遺跡は豊川右岸の下位段丘上に位置し、調査区の北部を中心に近世の整地層が見られ、礎石建物が確認された。堀と考えられる東西に走る溝と合わせ、江戸時代の旗本の島田氏の陣屋にかかわる遺構である。他に、弥生時代の竪穴住居跡や方形周溝墓が検出された。(都築)

## 新城市



江戸期整地面(南から)

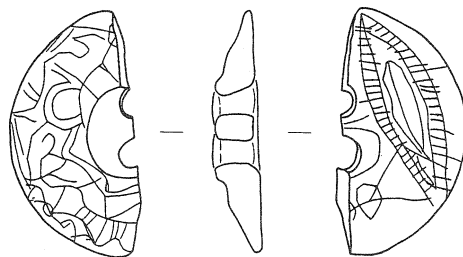
## 資料紹介

## 貴生町遺跡出土

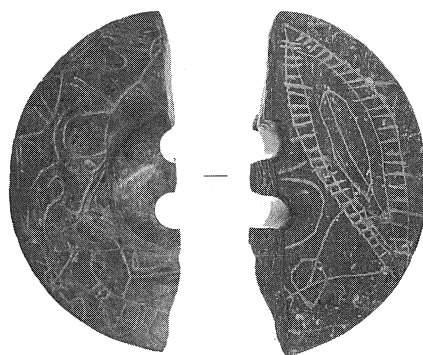
## 有 孔 円 板

貴生町遺跡は名古屋市西区に所在している。遺構は古墳時代前期と戦国・江戸時代の二時期にわかれる。本稿で紹介する有孔円板は調査区の東端を南北に走る幅14m、深さ2mの自然流路より出土した。材質は滑石製で、直径3.2cm、厚さ0.6cmで截頭円錐形を呈し、中央付近に直径0.3cmの円孔を二つあけている。表面(凸面)には直弧紋に似た紋様を刻み、裏面には何か具体的な絵画を線刻により表現しているが、約半分が欠損しているため内容は不明である。材質・形状などから紡錘車に似ているが、二つの穿孔をもつ類例は見あたらないため、用途も現在のところ不明である。共存遺物は古墳時代と近世のものが混在しており、時期はいずれとも決めがたいが、材質・形状・線刻内容(直弧紋)などから古墳時代に属する可能性が高い。

(調査研究員 樋上 昇)



(縮尺 1/1)



## セ ン タ ー 日 誌

## 埋蔵文化財専門研修会

愛知県埋蔵文化財調査センター

11月26日(木)・27日(金)

参加者 40名

## 来訪者

10/ 1 富山大学 広岡公夫氏 子持古窯磁気測定  
群馬県埋文センター 大木紳一郎氏

他 2名

10/ 2 一宮市博物館 田中禎子氏

10/ 6 名古屋市博物館 野澤則幸氏 他 2名

10/ 8 名古屋大学 木方洋二氏

10/12 瀬戸市埋文センター 藤澤良祐氏 他 1名

10/13 県婦人文化講座 43名

広島県埋文調査センター 事務局長

他 1名

10/21 江戸東京博物館 小林 克氏 他 2名

10/28 蒲郡市博物館 小笠原久和氏

10/29 愛媛大学 下条信行氏

11/ 2 檜崎彰一理事 田所遺跡現地指導

岐阜大学 金折裕司氏

東郷町町長・町議会議員 13名

11/ 4 皇学館大学 外山秀一氏 田所遺跡指導

11/ 5 津島市郷土史学習講座 10名

11/ 9 東栄町PTA 32名

県教職員課・文化財課視察 6名

11/11 岡山県埋文センター 長川 優氏 他 3名

11/12 東海市教育委員会 立松 彰氏

11/17・18 弥富中学校勤労体験学習 生徒 4名

11/24 吉良町教育委員会 13名

11/25 国立歴史民俗博物館 設楽博己氏

11/27 岐阜大学 金折裕司氏

## 埋蔵文化財愛知No.31

発行日 平成5年1月1日

編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター

発行 〒498 愛知県海部郡弥富町

前ヶ須新田字野方802番24

TEL 0567-67-4161~4163

印刷 株式会社 クイックス